

宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告書

2022

宇治市教育委員会

序

宇治市では、現在、「一人ひとりが輝き 伝統と新たな息吹^{いぶき}を紡ぐ^{つむ}まち・宇治」を目標に、人口減少、少子高齢社会の中でも選ばれるまちとなるため、宇治川を中心とした美しい景観や歴史を感じることができる魅力あるまち並みを守るとともに、宇治の伝統や歴史を新しい時代に伝え、さらに発展するまちを目指し、文化財の保存・活用及び情報発信等の推進に務めているところです。

また、第2次教育振興基本計画においても、「家庭・学校・地域でささえる宇治のひとづくり・まちづくり」を教育理念に、貴重な宇治の歴史や文化を世界に発信し、未来に継承し、歴史資料や伝統文化を保存・活用することで、市民の歴史文化意識^{じょうせい}の醸成を目指して、史跡の整備や文化的景観の修理事業などの文化財行政の推進を図り、文化財に関する調査・研究から得られた成果の教育普及に努めています。

宇治川兩岸に広がる宇治地区は、世界遺産平等院や宇治上神社をはじめ、「宇治の文化的景観」など、宇治を特徴づける歴史的・文化的要素が数多くある場所です。また、宇治市街地としてその賑わいが脈々と引き継がれてきた場所でもあります。本書は土地に刻まれた歴史を記録するために実施した発掘調査の成果を報告するものです。

今回の調査では平安時代から鎌倉時代にかけての土坑や流路などの遺構と土師器皿を中心とした遺物が見つかりました。これらは、今後、周辺の状況^{つまび}が詳らかになるにしたい、まちの変遷を追う足掛かりとなるでしょう。

末筆になりましたが、本調査の実施や報告書の作成にあたって、文化財の保存にご理解とご協力をいただいた宇治武田病院、合同会社ゆうをはじめとする関係機関、関係各位、ご支援をいただきました市民のみなさまに対して心より厚くお礼を申し上げます。

令和5年3月

宇治市教育委員会
教育長 岸本 文子

例 言

- 1 本書は、令和2年3月23日から同年6月10日まで宇治市宇治戸ノ内27-1他で実施した宇治市街遺跡（川西地区）の発掘調査と整理調査に関するものである。調査面積は約301㎡であった。
- 2 発掘作業にかかる土砂除去等作業は京都遺跡サービス株式会社に委託した。
- 3 整理等作業は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当した。実務は、荒川史及び松村真の指示のもと、植田真翔及び永福采音（京都橘大学文学部歴史遺産学科）、近藤真愛（京都芸術大学大学院歴史遺産研究領域）、上野純子、笠嶋良美、久後千穂、河野マミ及び廣田彩加が行った。
- 4 本書に収録する遺物及び写真等の資料は、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が保管している。
- 5 本書の執筆は荒川及び松村が担当した。出土遺物に関する部分には、近藤の協力を得た。
- 6 本書の編集は宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係が担当し、実務を久後が行った。
- 7 本書で使用する座標は、ITRF（国際地球基準座標系）に準拠した世界測地系国土地院第VI系を用いた。地図中で方位記号の指し示す方角は座標北である。高さの基準面には東京湾平均海面を用いた。
- 8 本書の土層色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（農林水産省農林技術会議事務局監修・日本色彩研究色標監修）第24版（2002）に従った。
- 9 本書で使用する遺構略号は、次のとおりとする。

略号	対応遺構	備考
SK	土坑	土器溜りを含む。
SD	溝	流路跡を含む。
SP	柱穴	円形でおおむね直径30cm以下のものをいう
SX	性格不明遺構	

本文目次

第1章	地理的・歴史的環境	1
第2章	近隣における過去の調査	4
第3章	調査の体制と経過	7
第4章	検出遺構	9
第5章	出土遺物	13
第6章	まとめ	16
参考文献		
抄録		
写真図版		

挿図表目次

第1図	位置図
第2図	宇治郷総絵図
第3図	既往調査地図
第4図	トレンチ配置図
第5図	上層平面図
第6図	下層平面図
第7図	土層断面図
第8図	遺物実測図
第9図	遺物実測図

写真図版目次

写真図版 1	1 調査前の状況（南から）
	2 西トレンチ上層検出状況（南から）
	3 西トレンチ上層遺構掘削状況（南から）
写真図版 2	4 西トレンチ下層検出状況（南から）
	5 西トレンチ下層検出写真（南から）
	6 西トレンチ下層遺構掘削状況（南から）
写真図版 3	7 東トレンチ上層検出状況（南から）
	8 東トレンチ上層掘削状況（南から）
	9 東トレンチ下層検出状況（南から）
写真図版 4	10 東トレンチ下層掘削状況（南から）
	11 東トレンチSD201土層堆積状況（北から）
	12 SK130掘削状況（南東から）
写真図版 5	13 SK130遺物出土状況（西から）
	14 出土遺物①（SK130）
写真図版 6	15 出土遺物②（遺物包含層他）
	16 出土遺物③（陶磁器）

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

宇治市街遺跡は、宇治橋を中心に宇治川の東西に広がる遺跡である。その範囲は宇治川が山峡から京都盆地に流れ出る谷口に当たり、かつて宇治郷と呼ばれた地域である。豊臣秀吉の太閤堤築堤以前の宇治川は、宇治橋下流で幾筋かに分流していたと考えられるが、本来は西に流れる傾向が強かったものと思われる。それは平等院境内や善法地区などの東西方向の連続した崖面から読み取れる。

宇治川は、河岸段丘を形成している。右岸では、喜撰山から醍醐山に至る山々の裾に沿って段丘が形成され、実際に、宇治川太閤堤跡の発掘調査では低い段丘面が確認されている。京阪宇治駅の東側でも、段丘面が見られる。左岸では、今の本町通りに沿って段丘崖があり、おそらくかつては東西方向に延びていたものと思われる。また、矢落遺跡の調査でも低い段丘面を確認している。しかし、これらの段丘面は、折居川が形成した扇状地によって覆われ、分かりにくくなっている。

第2節 歴史的環境

宇治川左岸においては、縄文時代後期から人々の生活の痕跡が認められる。縄文時代から古墳時代の遺構は、特に、平等院の南から東にかけての段丘面に集中していることが注目される。ただし、宇治妙楽 55 地点でのみ、古墳時代の遺構（溝 SD302）が確認されている。

平等院南側の府道拡幅に伴う発掘調査で、縄文時代後期の土器が出土している。また、平等院鳳翔館建設に伴う発掘調査では、土坑などの遺構とともにまとまった土器や石器が出土している。おそらく、平等院南側から山裾に至る段丘面に集落が広がっていたものと思われる。

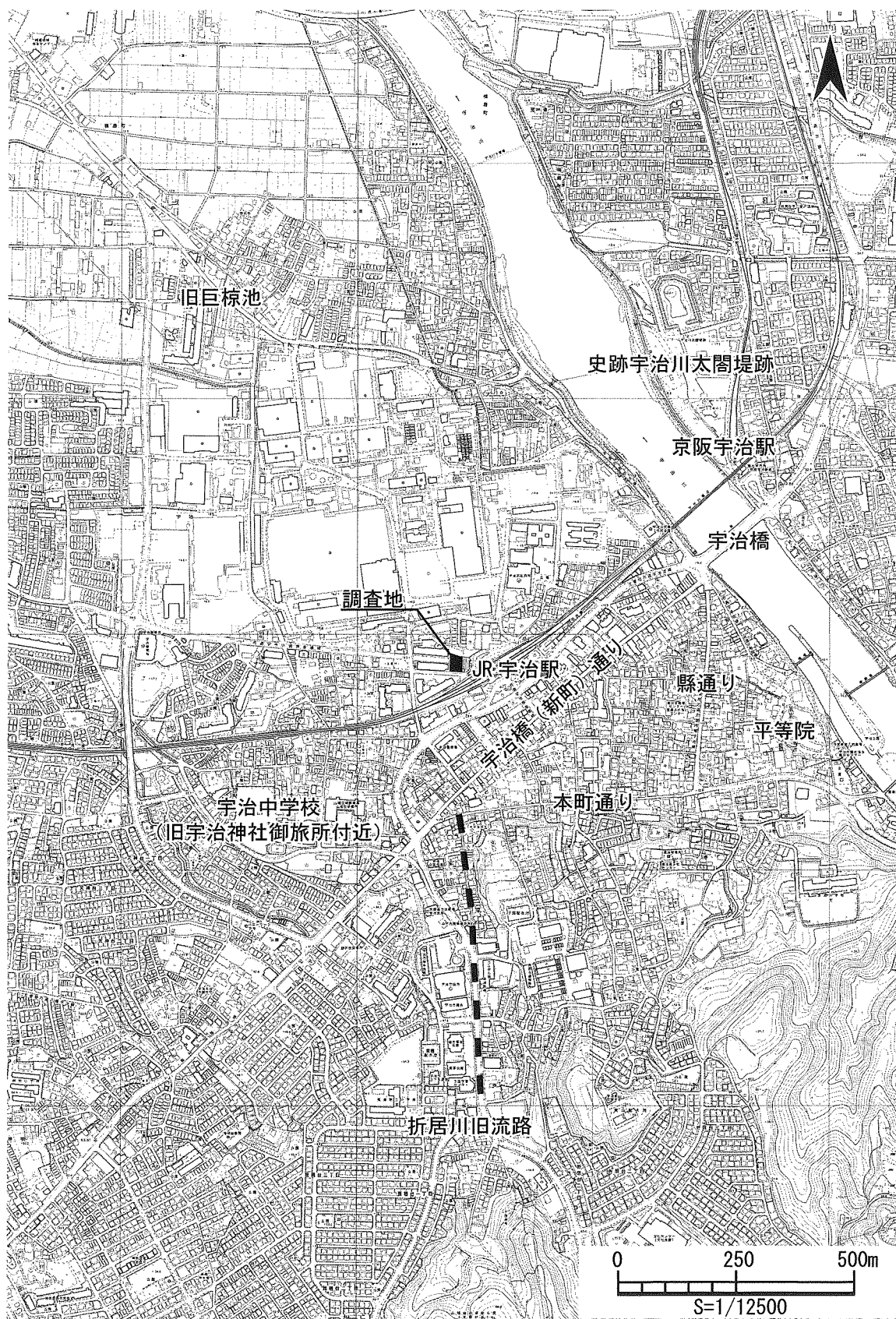
弥生時代から古墳時代にかけての集落もほぼ同じ場所に展開しており、竪穴建物や掘立柱建物が確認されている。時期としては弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構が中心となっているが、遺物としては弥生時代中期から古墳時代後期にかけてのものが出土している。

古墳時代の動向として特筆すべきものは、扇状地上の宇治妙楽 55 で検出した前述の溝 SD302 である。ここからは、多量の土師器・須恵器・韓式軟質土器や木製品が出土している。ここで出土した木製品は年輪年代測定法により、西暦 389 年伐採という結果を得ている。

飛鳥・奈良時代では、広範に遺物が出土しているが、顕著な遺構は検出していない。

縄文時代から古墳時代にかけて、宇治市街遺跡は大規模な集落が営まれた地域ではなかったが、平安時代に至り大きな変革を遂げる。後に平等院となる宇治別業を藤原道長が取得し、宇治別業が平等院となったあと、藤原氏一門によって別業群が造られるようになった。この藤原氏の別業群は、宇治に都市化と碁盤目状の街区をもたらした。

現在、その街区は、北は伍町通り、南は本町通り、東は縣通りとして確認できる。西については明確ではないが、宇治矢落の宇治中学校東側の南北道路付近ではないかと考えられる。この傍証としては江戸時代の『宇治郷総絵図』（第2図）に、現在は宇治橋（新町）通りと本町通りの交



第1図 位置図

差点付近にある、宇治神社御旅所がこの道沿いに描かれていることがあげられる。

別業は、街区内でも確認されているが、街区外の北や西でも存在することが過去の発掘の成果から確認されている。つまり当時の中宇治地域には、別業が集中して営まれていたと考えられる。

『台記別記』仁平3年11月26日条の藤原頼長春日詣の記事には、小河大路や成楽院東大路などの文字が見え、宇治の街区は京の都と同じ構造をしていたと思われる。

宇治市街遺跡の発掘調査では、各所から平安時代の遺物が多量に出土する。遺物の年代はほぼ11世紀から13世紀に限られ、その期間に宇治が「別業都市」として栄えていたと考えられる。

鎌倉時代に入り武家政権になると、藤原氏の実質的な権威の凋落^{ちようらく}とともに別業群が廃絶していったことは容易に想像できるが、中宇治地域の鎌倉時代から室町時代における様相は、文献的にも考古学的にも明らかではない。しかし、15世紀中頃には、宇治橋（新町）通りに展開する番保の存在が知られるため、この頃には大和街道と宇治橋を短絡する宇治橋（新町）通りができていたものと思われる。そして廃絶していった別業の跡地には、様々な店ができ、商業地になっていったようである。その証左として、室町時代の油屋と考えられる遺構も検出している。

『宇治郷総絵図』には、通りに沿って建物が立ち並ぶ江戸時代中頃の様子が描かれている。また、建物の背後には茶園が広がっている様子が読み取れる。



第2図 宇治郷総絵図（宇治市歴史資料館所蔵 一部加筆）

第2章 近隣における過去の調査

① 宇治妙楽 160 他での調査

この場所には、江戸時代後期に宇治代官となった上林六郎家の屋敷があったとされ、その後、宇治町役場を経て、宇治市役所となった。

昭和 56 年度に行った調査では、円形石組井戸を検出している。井戸からは鎌倉時代の遺物が多数出土しており、土師器皿や高台付き皿、瓦器などが出土した。

平成 30 年度の調査では、旧宇治市役所等の建物による攪乱が多かったが、平安時代から江戸時代の遺構を確認した。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面では、州浜状に傾斜した砂層の上に、小型の土師器皿が積み重なる様子で出土した。この土師器皿は、11 世紀から 13 世紀中に製作されたものであった。江戸時代の遺構としては、井戸や溝の石組列、埋め甕、苑池などの遺構を検出した。調査の結果、複数回の建て替えがあったと見られ、苑池への遣り水用とみられる溝を石垣の基部へと転用したことが分かった。

② 宇治壺番 29 での調査

昭和 59 年度に行った調査では、平安時代から室町時代にかけての遺構を検出した。

室町時代の遺構面では、規則的に並んだ土坑を 20 基以上検出しており、常滑焼と備前焼の大甕が据えられていた。油屋であった可能性が考えられている。

③ 宇治戸ノ内・里尻地内での調査

平成 10 年度には、今回の調査地より東に約 50 m の地点において調査を行い、奈良時代、平安時代、鎌倉時代及び江戸時代の遺物・遺構を検出した。

その中でも、平安時代後期とみられる東西方向の溝が特徴的であり、この溝を挟んで南側と北側で堆積状況が異なっていたことから、この溝が街区北限道路の側溝と考えられた。この調査によって、現在の伍町通りが宇治橋（新町）通りを越えて繋がっていることが明らかになった。

④ 宇治里尻 5 他での調査

平成 15 年度の調査で、古墳時代、奈良時代、平安時代及び室町時代の遺構を検出した。

この調査で注目されたのは、平安時代の建物と室町時代の建物の方位が異なることである。③で確認した伍町通りの延長が調査地の南を通っており、平安時代の建物は通りの方向に沿って正方位であった。ところが室町時代の建物は西へ 51 度傾いていた。このことから、宇治橋（新町）通りが成立する時期が室町時代の間に求められる可能性が考えられる。

⑤ 宇治里尻 36 他での調査

平成 16 年度に実施した調査では、弥生時代から江戸時代にかけての遺構を検出している。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構は、井戸や土坑、柱穴、大溝（東西方向で幅 6.5 m、深さ 1 m 程）、小石敷きの州浜が見られた。大溝は昭和 2 年に創業した日本レイヨン建設に際し廃された旧井川であるとみられる。井川は平等院付近で宇治川から取水し、小倉に至る人工用水路で

ある。

⑥ 宇治妙楽 55 での調査

平成 18 年度に宇治妙楽 55 で大規模な調査を行い、古墳時代から江戸時代までの遺構を検出した。

平安時代の遺構としては、苑池跡や柱穴などを検出した。苑池の汀^{みぎわ}には、彩色豊かな小礫が州浜状に敷かれていた。池底からは、土師器皿や凝灰岩片、下駄等が出土した。

特に注目されるのは、古墳時代の流路 SD302 で、初期須恵器・土師器・韓式軟質土器・木製品が出土している。出土木製品の年輪年代測定によれば西暦 389 年の数値が出ており、須恵器の出現年代の議論に一石を投じた。

⑦ 宇治宇文字 24-1での調査

本調査地の南に隣接する宇治宇文字 24-1 を平成 19 年度に調査した。その結果、平安時代後半の大型掘立柱建物跡と、鎌倉時代前半の小型掘立柱建物跡を検出した。遺物としては、土師器などの日常雑器に加えて、宋銭の「皇宋通宝」や青磁・白磁の碗や水差しといった舶来品が出土している。

⑧ 宇治戸ノ内 21-2 他での調査

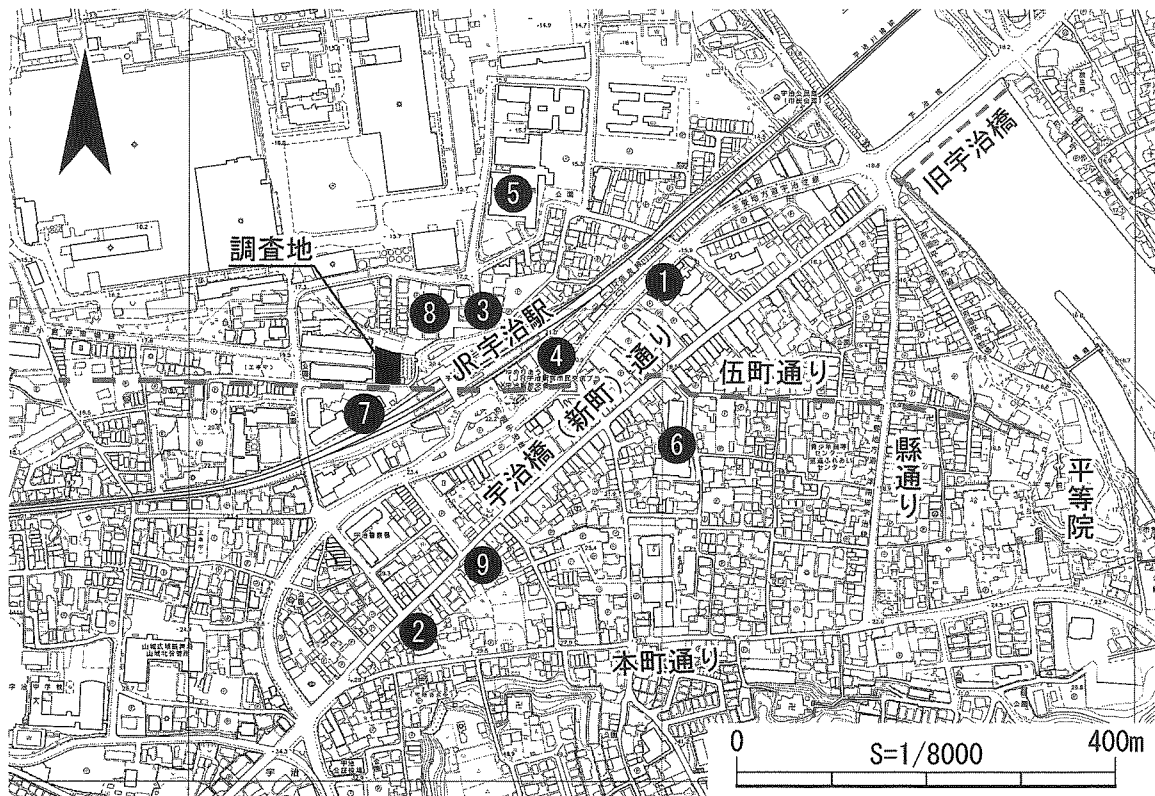
平成 20 年度に今回の調査地中心より東に約 70 m の地点で調査を行い、平安時代の掘立柱建物（廊）や井戸、苑池などの遺構を検出した。ここで注目されるのは、通常平安京では、北に建物を配し南に池を配置するが、ここでは北に池を配し池の南側に建物を配置していることである。平安京と宇治では地形の傾斜が逆であることによるものと思われるが、別業であることから通常のルールより自由度が高いのかもしれない。また池からは大量の土器が出土しており、その中には白色土器が多く含まれる。

⑨ 宇治壺番 19-2 での調査

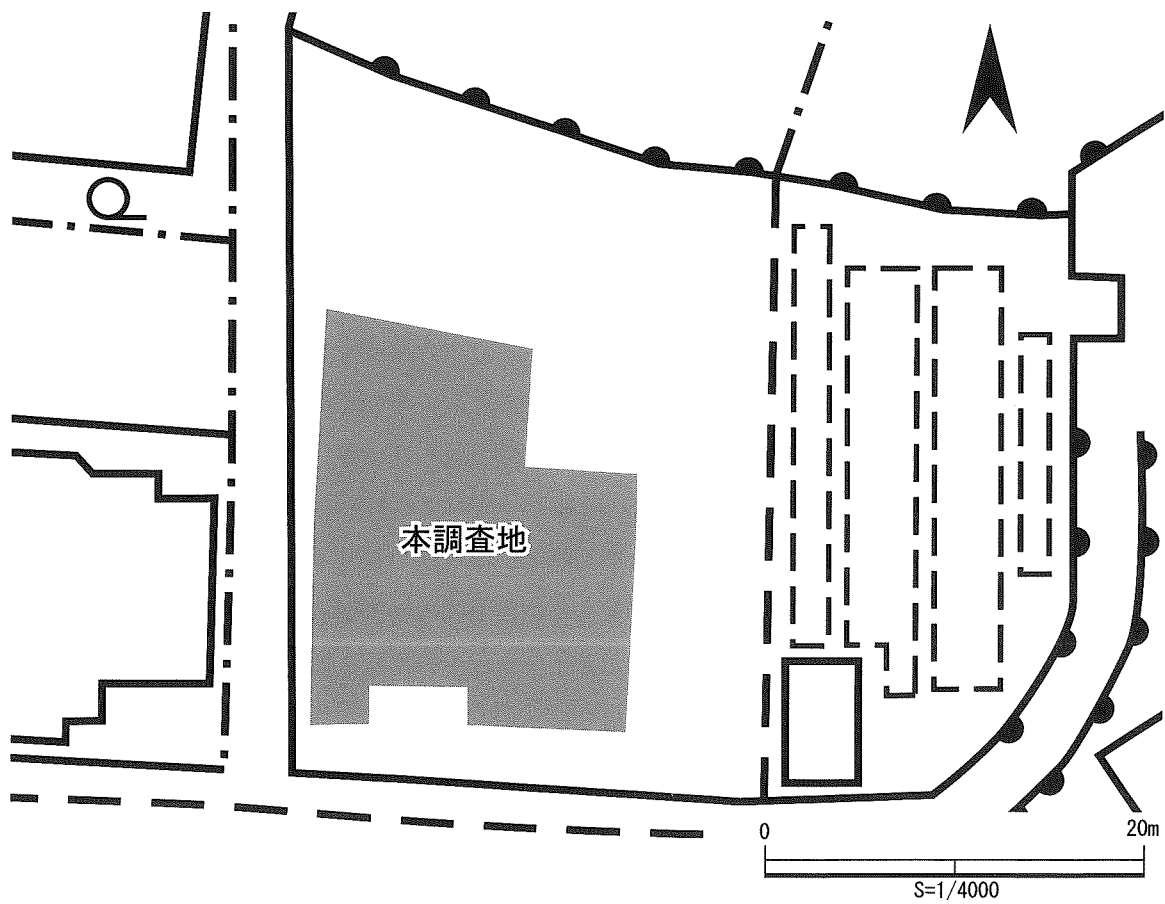
平成 30 年度に、宇治壺番 19-2 の調査を実施し、平安時代、鎌倉時代及び江戸時代の遺構を検出した。

平安時代から鎌倉時代にかけての遺構面では、多数の柱穴が確認できたことから、何度も建物が建て替えられた様子が窺える。当地では、動物の遺骸と、完形の土師器皿が共に埋められた土坑が検出されている。同じ形状の土坑は、調査地内各所で見られたが、同じように動物を埋葬した土坑は合わせて 3 基あった。土師器皿を共に埋めていたのは 1 基のみであった。

江戸時代の遺構面では、広範囲に比熱した地面跡と、漆喰製の箱型遺構を検出している。江戸時代中頃に描かれた『宇治郷総絵図』によると、この付近には茶園が広がっていたものと見られ、これらの遺構は茶の加工に関わるものであると考えられる。他には、貯蔵用と見られる甕が複数埋まった状態で出土した。



第3図 既往調査地図



第4図 トレンチ配置図

第3章 調査の体制と経過

第1節 調査の体制

調査は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づいて実施されたものであり、発掘調査組織は、次のとおりである。

＜発掘調査責任者＞

宇治市教育委員会教育長 岸本 文子

＜発掘調査事務局＞

宇治市都市整備部部長 木下 健太郎（令和2年3月31日まで）

同 久下 伸

同部副部長 久下 伸（令和2年3月31日まで）

同 米田 晃之

同部歴史まちづくり推進課長 久下 伸（令和2年3月31日まで）

同 谷口 弘明（令和4年3月31日まで）

同 谷澤 潔

同課副課長 谷口 弘明（令和2年3月31日まで）

同 大谷 由欣代

＜発掘調査担当＞

同課文化財保護係長 荒川 史（令和2年3月31日まで）

同 齊田 雄太（令和4年3月31日まで）

同 大野 壽子

同係主任 大野 壽子（令和4年3月31日まで）

同 松村 真

同係主事 岡 紗佑里

同 浅田 洋輔

同係非常勤職員 久後 千穂（令和2年3月31日まで）

同 松村 真（令和2年3月31日まで）

同 山口 博（令和2年3月31日まで）

同係会計年度任用職員 荒川 史（令和4年3月31日まで）

同 松村 真（令和3年3月31日まで）

同 久後 千穂

同 大崎 拳斗

＜指導機関＞

京都府教育庁教育委員会 指導部文化財保護課

第2節 調査の経過

ア 届出と通知

(ア) 届出

令和元年11月19日付けで、合同会社ゆう代表社員武田隆久氏より、文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財の発掘に係る届出が提出された。これは、サービス付き高齢者向け住宅の建設に伴うものである。

(イ) 通知

京都府教育委員会から令和2年1月7日付け1教文第3号の89(通知)を受けて、発掘調査を行うことになった。

イ 発掘調査の実施

(ア) 試掘調査

当調査地は、北側の隣接地と約3mの高低差があり、コンクリート擁壁が設置されていた。このコンクリート擁壁の改修工事の際に立ち会ったところ、包含層等は確認できなかったため、初めに試掘調査を行い、遺構の有無を確認することとした。

試掘調査は、令和2年3月23日に行った。幅約3m、長さ約20m、深さ2～3mのトレンチを設けた。調査の結果、遺構・遺物を検出したため、本発掘調査を行うこととした。

(イ) 発掘調査

試掘調査の成果より、遺構面の残存が確認できたことから、令和2年3月30日から本発掘調査に着手した。

調査地内で反転掘削を予定し、方角よりそれぞれ、東トレンチ・西トレンチとした。調査面積は、両トレンチ合わせて約301㎡である。

初めに、試掘調査トレンチに接続する西トレンチから掘削を開始した。重機による掘削で、遺構面直上まで掘り下げ、その後は手作業での遺構の検出に努めた。調査地の北に隣接する地点には、かつて旧日本レイヨン工場の引き込み線があり、この建設により西トレンチの北半部が削平を受けていることが明らかになった。このため東トレンチはそれを考慮して、トレンチの大きさと位置を変更した。

遺構を検出した面は、大きく分けて近世(江戸時代)と、平安時代から鎌倉時代までの2面であった。掘削作業終了後、検出遺構については図面及び写真で記録を作成した。

東トレンチも基本的に西トレンチと同様の掘削手順を踏み、令和2年6月10日に調査を終了した。調査期間は試掘調査を含めて、同年3月23日から6月10日までの80日間となり、休日や雨天中止日を除いた実質作業日数は52日間であった。

(ウ) 整理等作業から報告書の作成

出土遺物等の整理作業は令和2年度中に実施し、令和3年度及び令和4年度に報告書の執筆や編集等の報告書作成作業を行った。

第4章 検出遺構

検出した遺構は、溝、土坑、その他性格不明遺構である。

遺構は2面で確認した。上層は近世のもので、下層は平安時代後期から鎌倉時代初期のものである。ここでは、基本層序と主要な遺構について述べていく。

第1節 基本層序

堆積状況は、上層より、表土層、近代盛土層、平安時代後期から鎌倉時代の包含層（9層）、地山であった。この包含層の上面から近世の遺構を検出し、地山の上面から中世の遺構を検出した。調査地北半部では、前章で述べたとおり近代における削平を受けており、包含層は失われている。

第2節 主要遺構

今回の調査で検出した遺構は、全て合わせて255であり、その内訳は、土坑77、大溝1、溝5、柱穴9、ピット149、性格不明14であった。

ア 上層の遺構

多数のピットが検出されたが、互いに組み合うものが見当たらず、また、柱痕や柱当たりが見られなかったことから、殆どのものは柱穴とはなり得なかった。ただし中には根石を有し、南北方向に並んでいるピットがある。

イ 下層の遺構

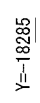
多数のピットや土坑が検出された。上層同様に、柱根や柱当たりは見られなかったため、一部を除いて、その殆どは柱穴とはなり得なかった。また、遺構同士で組み合わせるものが見られず、建物跡といった遺構としては認められなかった。

（ア）大溝 SD216

東トレンチで検出された南北方向の溝である。幅（東西長）は1.8 mから2.8 mで、深さは0.7 mから1.5 mである。遺構埋土は砂と円礫であり、その中には、拳大の円礫を多く含む層もあることから、洪水のような速い流れによって埋没したことがわかる。壁面にはピットが並ぶことから、人為的に管理されていた溝であろう。埋没した状況から単に区画を意図した溝とは考えられず、折居川に接続した用水路か、それを兼ねた区画溝の可能性がある。

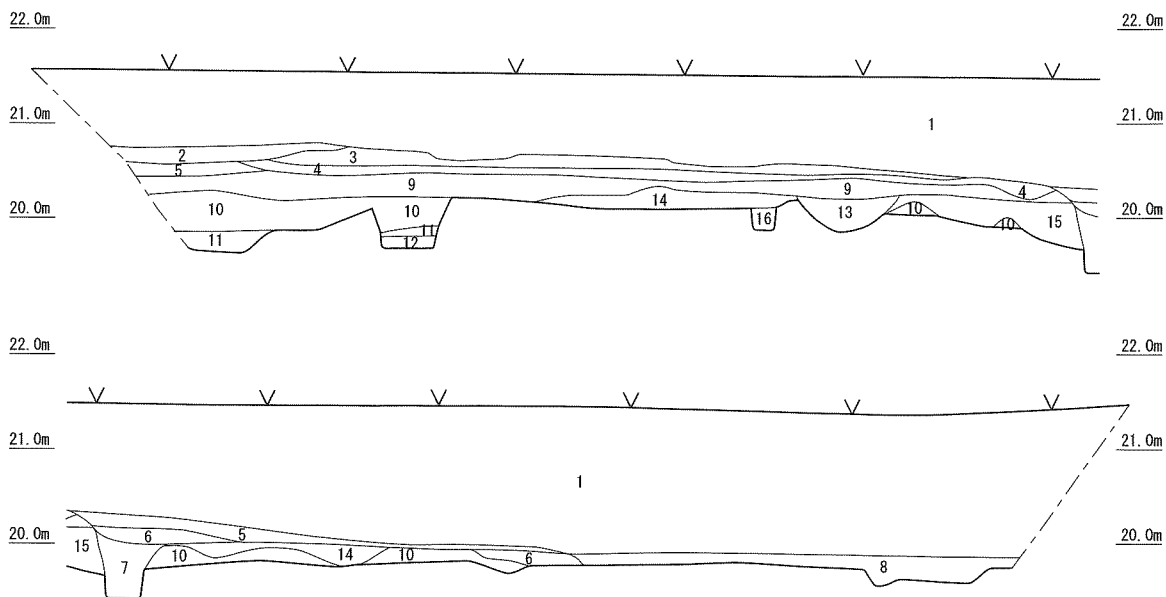
（イ）土坑 SK130

西トレンチ南西部で検出された土器溜りである。平面形状は不整形な楕円形で、南北6 m、東西3 m、である。深さは0.2 mである。土師器、瓦器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土した。土師器は小皿が多く出土している。一部により深く掘り込まれた部分があったが、土色及び土質が同じであったため、明確な区別が難しく、同じ遺構として判断した。そこから土器溜りの土器群より古い土器が出土している。

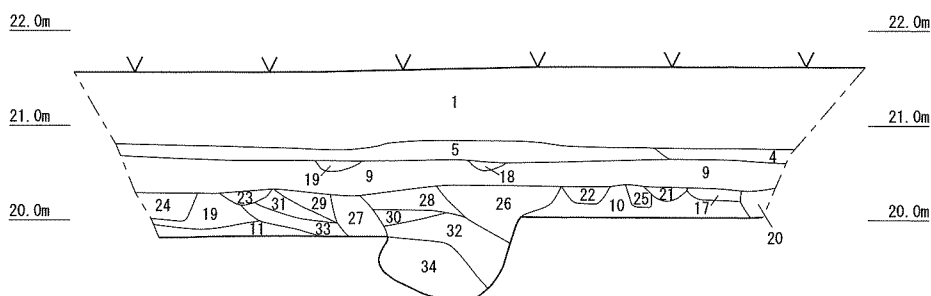


第6図 下層平面図

西トレンチ西壁断面図



東トレンチ南壁断面図



- | | | |
|----------------------------|--------------------------------|---------------------------------|
| 1 近代攪乱 | 13 10YR2/3黒褐色粗砂(よくしまる) | 24 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂φ3cm程の小礫混 |
| 2 10YR4/4褐色砂質土 | 14 10YR4/4褐色粗砂 | 25 10YR4/4褐色粗砂φ1~3cmの礫含 |
| 3 10YR5/4にぶい黄褐色細砂 | 15 10YR4/4褐色粗砂 砂礫層 | 26 10YR5/6黄褐色粗砂φ2~10cmの礫多く含 |
| 4 10YR5/5にぶい黄褐色細砂(遺物多く、炭含) | 16 10YR3/4暗褐色中砂 | 27 10YR6/4にぶい黄褐色中砂 |
| 5 10YR4/4褐色中砂(炭混) | 17 10YR3/4暗褐色細砂φ5cm程の石混 | 28 10YR3/3暗褐色粗砂φ3cm程の小礫含 |
| 6 10YR4/4褐色粗砂φ10cm程の石多く含 | 18 10YR3/3暗褐色細~中砂(シルト・粘土・礫含) | 29 7.5YR3/2黒褐色砂質土φ3cm程の礫含 |
| 7 10YR7/3にぶい黄褐色中砂 | 19 10YR3/3暗褐色粘土混じり砂質土φ3~5cmの礫含 | 30 10YR5/6黄褐色粗砂φ1cmの礫多く含 |
| 8 10YR2/3黒褐色粗砂 | 20 10YR3/4暗褐色粗砂 | 31 10YR4/3にぶい黄褐色粘土混じり中砂φ1cm程の礫含 |
| 9 10YR5/3にぶい黄褐色砂質土 | 21 10YR3/3暗褐色粗砂(φ1cm程の小礫含) | 32 10YR4/3中砂φ2~4cm程の礫多く含 |
| 10 10YR4/6褐色粗砂 | 22 10YR3/4暗褐色粗砂φ1~3cmの礫含 | 33 10YR3/4暗褐色中砂φ1cm未満の礫含 |
| 11 10YR5/6黄褐色中砂 | 23 10YR3/4暗褐色粘質粗砂φ1cm未満の礫含 | 34 10YR4/3粗砂φ5~10cm程の礫多く含 |
| 12 10YR4/4褐色中砂 | | |

第7図 土層断面図

第5章 出土遺物

第1節 出土遺物の概要

今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、出土時点においてコンテナバット35箱分である。出土遺物の内訳は、出土量の多いものから順に、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、須恵器、金属、その他である。遺物の年代としては、平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものが目立ち、次いで室町時代から江戸時代にかけてのものであった。他に少量であるが、奈良時代のものも出土している。

遺物の多くは、土坑SK130からの出土である。土坑SK130を含めた土坑類から出土した遺物は、遺存状態がよく、完形近くまで復元できたものもある。包含層等から出土したものは、細片化しており、製作技法や使用の痕跡を留めないものも多い。

① 土坑SK130出土遺物 (1～37、46)

土師器、瓦器、瓦、白磁がコンテナバット3箱ほど出土している。出土した土師器は、ほとんどが皿であった。

1～33は土師器皿である。このうち32・33はコースター形のものである。反転復元のものが多いため、正確な口径が求められないが、少なくとも9～10cmと15cm前後の大小2種類に分けられる。基本的には2段ナデを施すが、小皿は上段のナデ幅が狭く、断面は三角形を呈する傾向にある。器壁は厚めである。

34は白磁碗の底部である。輪状高台で見込みに圈線を施す。

35～37は瓦器碗である。35・37は樟葉型、36は大和型である。

46は土坑SK130から出土した平瓦である。凸面は縄叩き、凹面は布目である。

これらの遺物から、土坑SK130は12世紀中頃の遺構と考えられる。

② 土坑SK171出土遺物 (38～42)

38・39・41・42は土師器皿である。土坑SK130と同様の傾向であり、同じ時期の遺構と考えられる。

40は樟葉型の瓦器碗である。

③ 土坑SD216出土遺物 (43～45)

土師器、瓦器などが少量出土している。

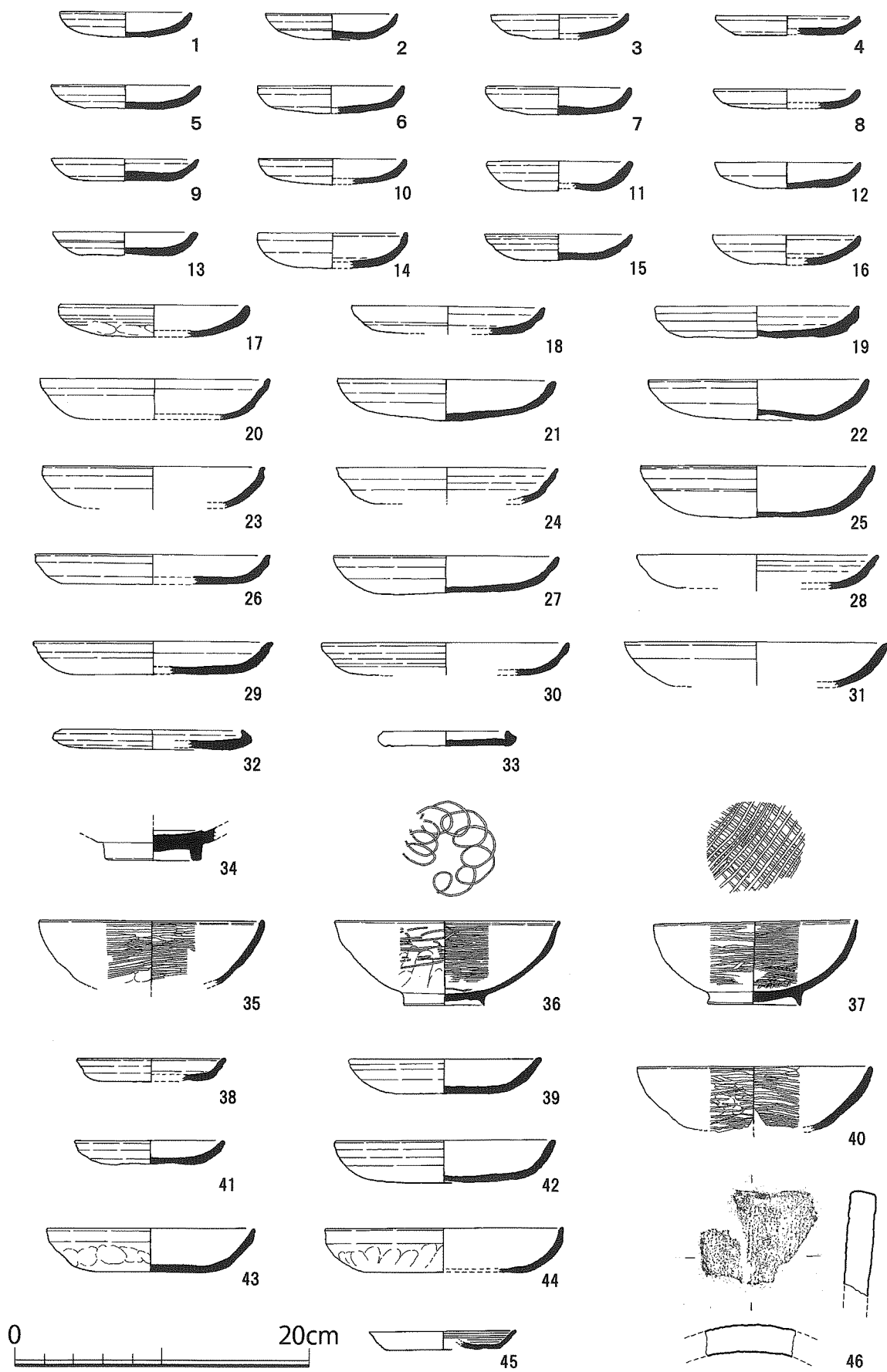
43は2段ナデを持つ土師器皿である。外面下半部にユビオサエ痕が残る。44は1段ナデを持つ土師器皿である。外面立ち上がり部分から底部中心に向かうナデ痕が残る。

45は瓦器の小皿である。

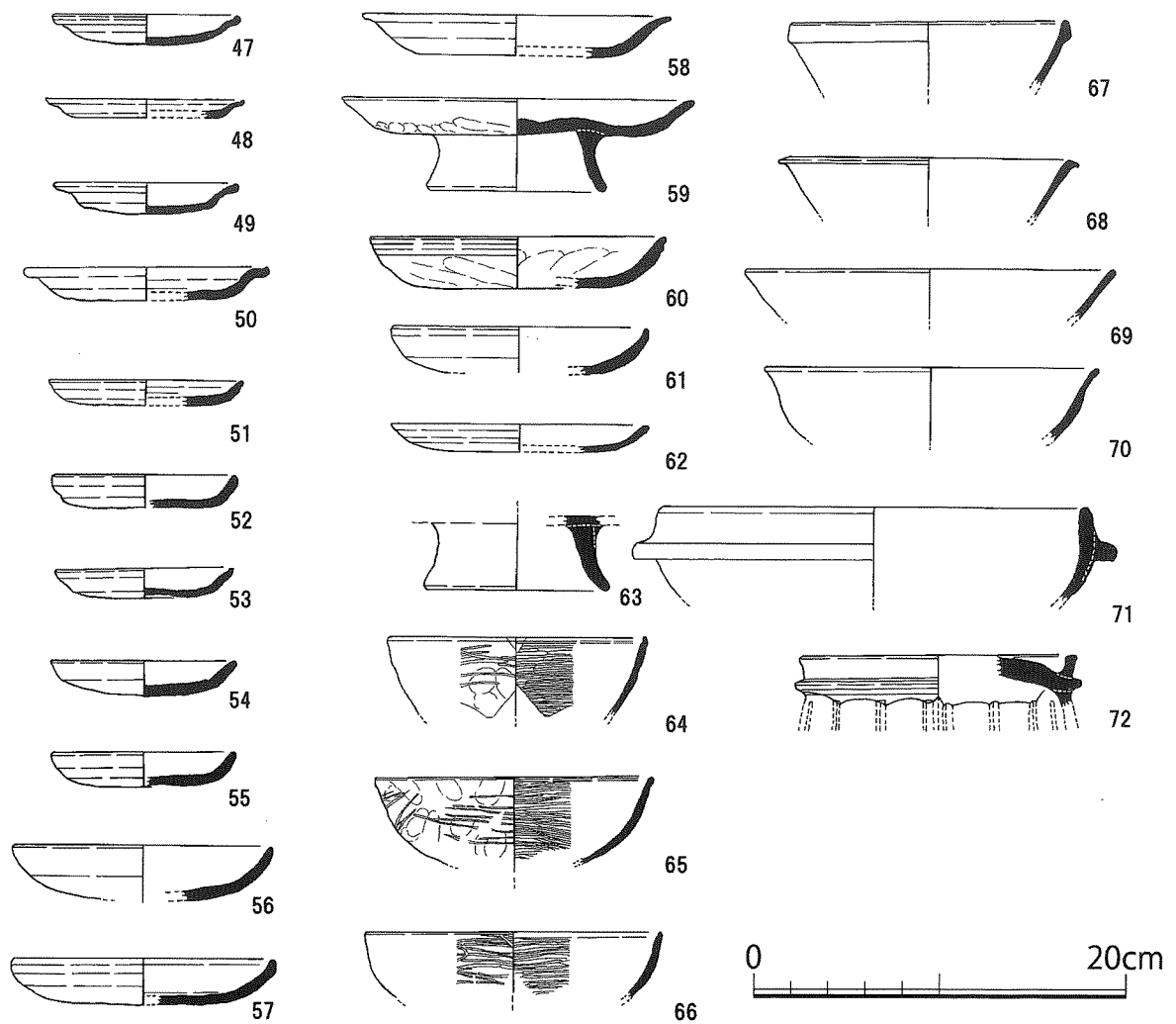
④ その他の遺構・包含層から出土の遺物 (47～72)

47～50はいわゆる「ての字状口縁」を持つ皿である。口径10cm前後のものが多いが、50は約13cmで、他のものより古くなる可能性がある。

51～63は土師器皿である。いずれも2段ナデを施す。58・59は口縁部が外反しており、古い様相を示す。



第8図 遺物実測図



第9図 遺物実測図

64～66は瓦器碗である。64は樟葉型、65・66は大和型である。

67～69は青磁碗である。67は横田・森田分類の越州窯系Ⅱ-2f。68は龍泉窯系杯Ⅲ-1aである。

70は緑釉陶器の碗である。

71は土師質羽釜である。

72は須恵器の円面硯である。

第6章 まとめ

今回の調査では、多くの遺構を検出したが、その性格を特定できるものはわずかであった。そのうちの一つである土坑 SK130 は 12 世紀中頃を中心とした時期の土器溜りであるが、下層のピットからは 11 世紀に遡りうる土器も出土している。

第 2 章で前述したように、北東約 70 m の地点の宇治戸ノ内 21-2 では、掘立柱建物や池などの別業に関する遺構が検出された。加えて、同様に、12 世紀中頃を中心とした土師器皿が、池の中から大量に出土している。同地から別業に関する遺構が検出されていることを踏まえると、土師器皿の大量投棄は当時の貴族文化の風俗に関するものと推察される。

そのような解釈を加えるならば、土師器皿が多く出土している土坑 SK130 もまた、別業に関する遺構のひとつである可能性は否定できない。

また調査地東部で検出した溝 SD216 が、激しい洪水によって埋没したことは、その堆積状況により明らかである。埋土の礫の状況から見ると、かなり激しい洪水が起きたものと見られ、この原因としては、近隣を流れる折居川の氾濫が有力であろう。また、この溝内の側面には杭が連続して打たれていることから、強い流水を意識して作られた人工流路と考えられた。あるいは、この溝 SD216 は折居川と接続しており、用水路として機能していた可能性も否定はできない。

今回の調査で出土した遺物は、12 世紀中頃から 13 世紀初頭のもものが中心であるが、そのほかに注目される遺物として、円面硯がある。円面硯は陶硯の一種で、陶硯は一般に 7 世紀から 10 世紀に使用されたとされる。

宇治市街遺跡ではこれまで、奈良時代の顕著な遺構・遺物が検出されていない。したがって、遺構から出土していないため評価は難しいが、宇治市街遺跡から出土したという点で、今回の調査で出土した円面硯は貴重な一例である。別業が形成される以前の宇治市街遺跡の土地利用について、新たな課題が出てきたといえよう。

参考文献一覧

- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2002年
- 日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅳ』2000年
- 奈良文化財研究所『平城京出土陶硯集成Ⅰ』-平城宮跡-2006年
- 奈良女子大学『肥前陶磁の世界』2004年
- 京都市文化市民局『平成29年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』2017年
- 京都市文化市民局『平成27年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書』2015年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第1集』1982年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第16集』1990年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第19集』1992年
- 宇治市教育委員会『平等院旧境内多宝塔推定地第1次発掘調査概報宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第24集』1994年
- 宇治市教育委員会『平等院旧境内多宝塔推定地第2次発掘調査概報宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第26集』1995年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第44集』1999年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第48集』2000年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報第52集』2002年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第55集 宇治市街遺跡（宇治里尻5他）発掘調査報告書 - JR 宇治駅前市民交流プラザ建設に伴う発掘調査 - 』2004年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第56集』2004年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第58集 宇治市街遺跡（宇治妙楽87-1）発掘調査報告書』2005年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第70集』2008年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第71集』2013年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第82集』2012年
- 宇治市教育委員会『宇治市埋蔵文化財調査報告書第87集 浄妙寺跡発掘調査報告書』2013年
- 宇治市『宇治市史2 中世の歴史と景観』1986年
- 現地説明会資料（宇治妙楽55・武田病院）
- 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第3号』1996年 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要第12号』2019年 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』1995年 真陽社
- 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978年 九州歴史資料館
- 宇治市『「宇治の文化的景観」文化的景観保存計画書』2012年
- 宇治市『重要文化的景観「宇治の文化的景観」整備計画Ⅰ』2016年
- 中井淳史「宇治と京都—かわらけの「距離」、文化の「距離」—」『佛教藝術 279号』2005年 毎日新聞社
- 中井淳史『日本中世土師器の研究』2011年 中央公論美術出版
- 近藤真愛「平安貴族の饗宴 - 宇治別業出土土師器皿の考古学的研究 - 」（卒業論文）
- 京都芸術大学『2020年度 京都芸術大学卒業展作品・論文集』2021年
- 平等院『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告書』1991年 平等院
- 平等院『平等院 庭園発掘調査概要報告』1992年 平等院
- 平等院『平等院 庭園発掘調査概要報告II』1993年 平等院
- 京都府京都学・歴史館京都学推進課『令和3年度 京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（宇治編）』未刊

抄 錄

ふりがな	うじしがいいせき（かわにしちく）はつくつちようさほうこくしょ							
書 名	宇治市街遺跡（川西地区）発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第93集							
編著者名	宇治市教育委員会							
編集機関	宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係							
所在地	〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33番地							
発行年月日	令和5年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘 面積	発掘原因
		市町 村	遺跡 番号					
うじしがいいせき 宇治市街遺跡 かわにしちく （川西地区）	うじとのうち 宇治戸ノ内 ほか 27-1他	26204	108-1	34度89 分05秒	135度79 分98秒	令和2年3月23日～ 令和2年6月10日	301㎡	サービス付高齢者向け 住宅建築に伴う発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
宇治市街遺跡 （川西地区）	集落	平安 ～ 近世	大溝・土坑		土師器・瓦器・須恵器・陶磁 器		特になし	
要約	平安時代から鎌倉時代にかけての土器溜り土坑を検出し、その底部で土師器皿などを多数検出した。奈良時代製作とみられる円面硯が包含層より出土した。鎌倉時代までに人が管理する流路があったが、鎌倉時代に洪水が起き、周囲の遺構とともに埋没したことが明らかとなった。							

写 真 図 版 目 次

調査前～西トレンチ掘削の状況写真	写真図版 1・2
東トレンチ掘削の状況写真	写真図版 3・4
土坑 SK130 部分写真	写真図版 4・5
出土遺物写真	写真図版 5・6



1 調査前の状況（南から）



2 西トレンチ上層検出状況
（南から）



3 西トレンチ上層遺構掘削状況（南から）

4 西トレンチ下層検出状況
(南から)



5 西トレンチ下層検出写真
(南から)



6 西トレンチ下層遺構掘削状況
(南から)





7 東トレンチ上層検出状況
(南から)



8 東トレンチ上層掘削状況
(南から)



9 東トレンチ下層検出状況
(南から)

10 東トレンチ下層掘削状況
(南から)



11 東トレンチSD201土層堆積
状況(北から)



12 SK130掘削状況(南東から)





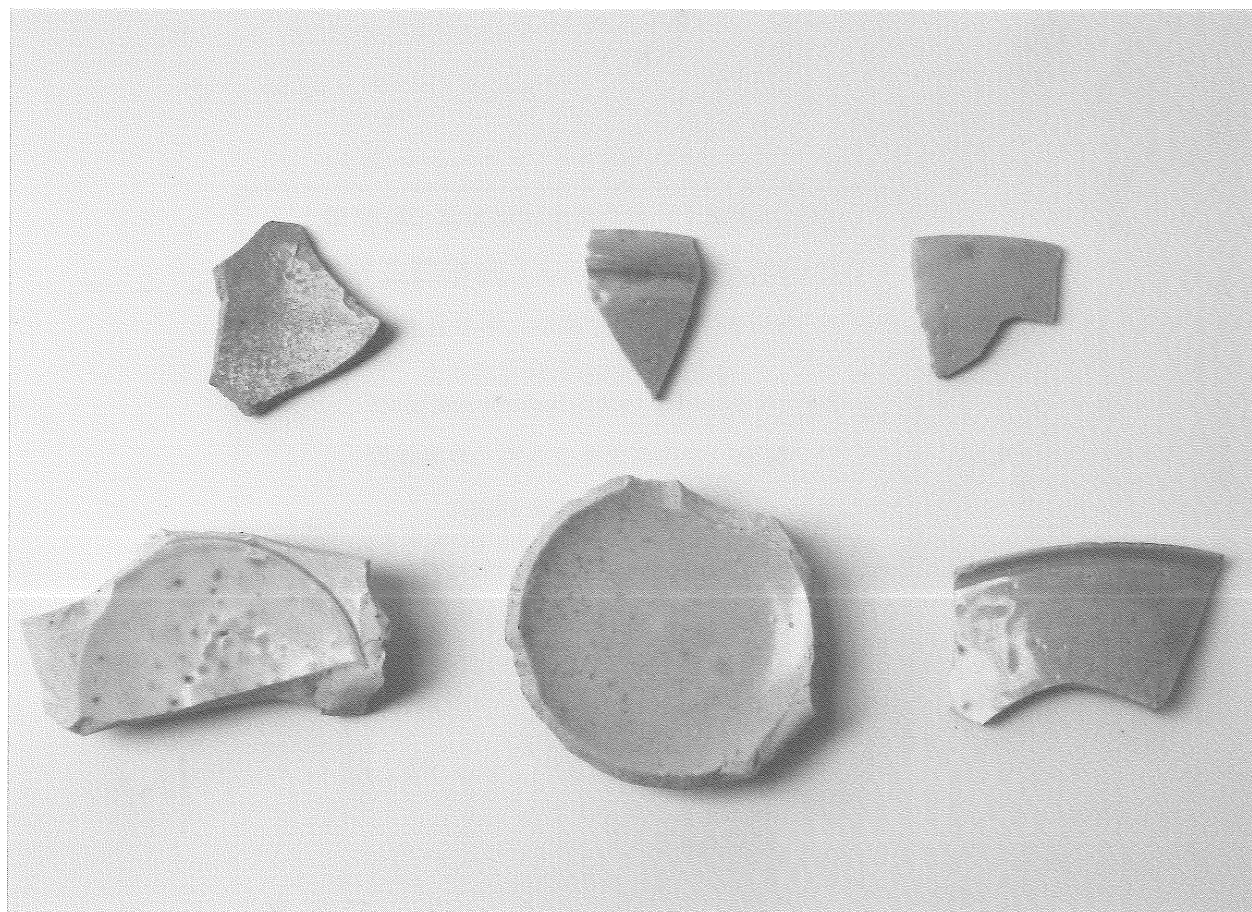
13 SK130遺物出土状況（西から）



14 出土遺物①（SK130）



15 出土遺物②（遺物包含層他）



16 出土遺物③（陶磁器）

宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第93集
宇治市街遺跡(川西地区)発掘調査報告書

発行日 令和5(2023)年3月31日

発行者 宇治市教育委員会
(〒611-8501 京都府宇治市宇治琵琶33)

編集 宇治市歴史まちづくり推進課

印刷 有限会社新進堂
(〒611-0021 京都府宇治市宇治妙楽9)